

# \*\*\* 今日の健康 (6月) \*\*\*

## < 風しん 最近の話題 (その1) >

近年では風しんの発生報告数が減少し、風しん全例で疫学調査の実施が可能と考えられる件数まで減少したため、風しんの排除状態を達成するため、感染症法の施行規則（平成10年厚生省令第99号）を改正し、診断から届出までの期間を「7日間以内」から「直ちに」へと変更することが平成29年12月15日に告示され、平成30年3月1日より施行されました。



### <風しんの疫学>

従来風しんは小児が罹患する疾患であると考えられてきましたが、2011年から2013年にかけて本邦においてこの風しんが成人を中心に大流行し、大きな問題となりました。このときの流行の特徴は、20-40歳代の成人が患者の8割近くを占めていたことです。

なかでも男性の罹患数が女性に比較して多く、この理由として過去の風しんの定期予防接種制度の影響が挙げられます。

風しんの罹患を確実に防ぐには、2回の予防接種が必要ですが、現在20~40歳台の方々の中には、風しんワクチンを1回しか接種していない、あるいは全く接種していない方が多く存在します。

実際に、この世代では風しんの抗体保有率が他の世代と比較して低いという調査結果もあります。よってこの世代には風しんに罹患するリスク高い者が相当数存在すると考えられています。

### <風しんの症状>

風しんは発熱、発疹、リンパ節腫脹を3主徴とする疾患です。潜伏期間は、感染から14~21日。リンパ節腫脹が特徴的であり、特に耳介後部の腫大が著明です。

発熱後24時間以内に発疹が出現するのが特徴ですが、発熱があるのは発症者の約半数程度しかないという報告もあります。

結膜炎・鼻汁などのカタル症状を伴うことがあり、実際の診療の場では薬疹などと間違えられることも多いです。

風しんは一般的に重症化しないと考えられていますが、まれに急性脳炎、血小板減少性紫斑病などの重篤な合併症を診ることもあります。

風しんに対して免疫のない女性が妊娠初期に風しんに罹患すると、出生する児に先天性風しん症候群を引き起こすことがあり、先天性風しん症候群の児は先天性心疾患、難聴、白内障等を発症します。

引用：日本病院会雑誌 2018年4月号 46(424-427)

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏